シリーズ・がんの診断と治療

④ 乳がん

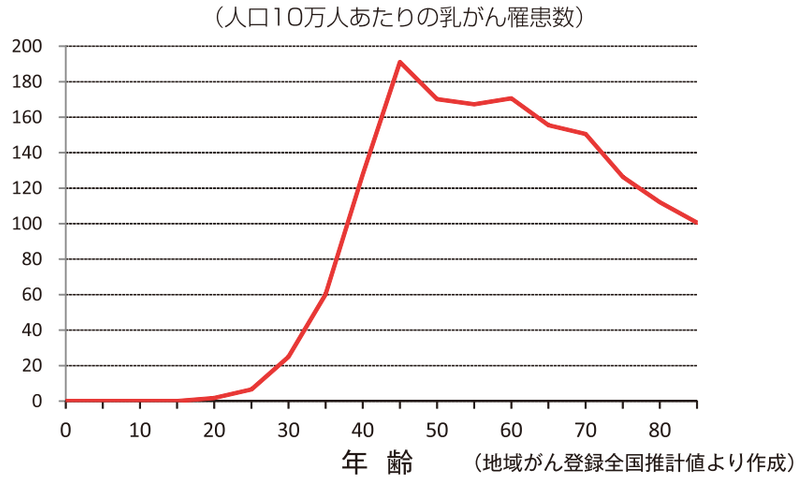
地域がん診療連携拠点病院

独立行政法人 国立病院機構
別府医療センター

【はじめに】

日本では乳がんが年々増加し、女性のがん罹患の第一位になっています。現在、毎年約 5 万人が乳がんに罹患し、がん全体の約 20%をしめています。乳がんになりやすい年齢をみると、30 歳代後半から増えてきて 40 歳代後半にピークがあり、70 歳を過ぎてもそれほど減りません（図 1）。

図１　年齢別の乳がん罹患率（2007年）



【症状】

初期の乳がんでは、体調が悪くなるといった全身症状はほとんどありません。このため、唯一の手がかりともいえる乳房の変化を放置していると、がん細胞は増殖し乳腺だけにとどまらず、わきの下のリンパ節や肺などに広がります。30 歳になったら乳がんの自己検診を行い、また 40 歳以上の方は定期的にマンモグラフィ検診を受けることが大切です。更に以下の症状を認めた場合は、迷わず専門医を受診することが大切です。

1. 乳房にしこりがある
2. 乳房にひきつれ、くぼみがある
3. 乳頭から分泌物がでる
4. 乳頭が陥没していたり、ただれや変形がある
5. わきのしたにグリグリがある

【検査と診断】

1) マンモグラフィ：乳房の X 線撮影のことをいいます。触診で診断できない小さなしこりや、しこりになる前の石灰化した微細な乳がんを発見することもでき、乳がんの診断にはかかせないものです。ただし、乳腺が密で脂肪が少ない若年者の場合は X 線写真が全体的に白く映ってしまい、しこりを見つけるのが難しいことがあります。また、妊娠している方は検査できません（図 2）。

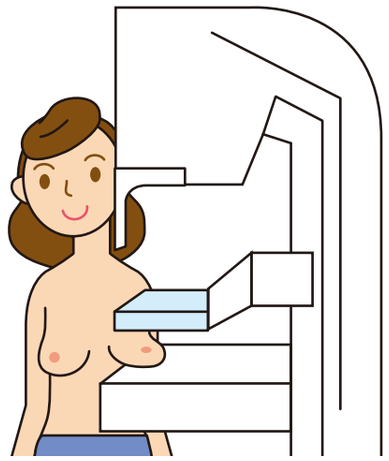


図２　マンモグラフィ

2) 超音波検査：乳房に超音波をあて、組織からの反射をとらえて画像にし、わずかな濃度の違いで病巣を診断するものです。診断精度が向上し、安全かつ容易に行えるもので、乳腺疾患の診断に必須の検査となっています。マンモグラフィに比べて小さなしこりや石灰化の診断は困難ですが、しこりの内部構造の鑑別がしやすく、乳腺の密な若い人の診断にも使うことができます（図 3）。

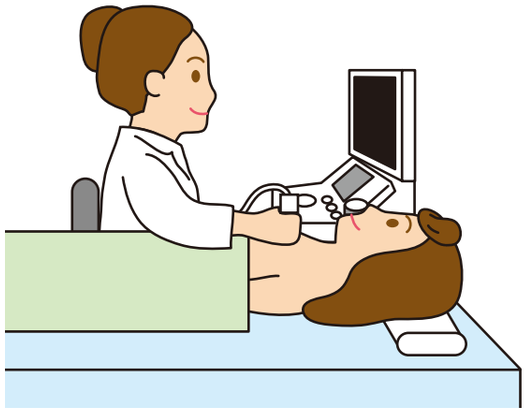
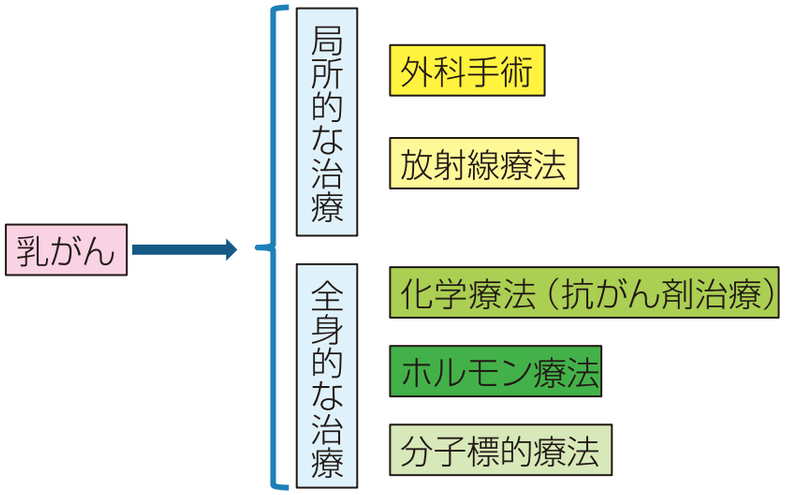


図３　超音波検査

【治療】

治療には外科手術、放射線療法などの局所療法と、化学療法、ホルモン療法、分子標的療法などの全身療法が含まれます。病状や患者さんの希望にあわせて最適な局所療法と全身療法を組み合わせて行います（図 4）。

図４　診療の流れ



1）外科手術：筋肉を残してすべての乳房を切除する乳房切除術と、乳房を部分的に切除しがんを取り除く乳房温存手術が標準的な術式です。乳房温存手術では癌を取り残さないことが大前提であり、がんの広がりが大きい場合は、乳房温存手術は適さず乳房切除術が選択されます。
当院では、手術によって失われた乳房を形成外科の技術によって再建する方法があります。乳房を失うことで不便や不自由さを感じた場合は、乳房を再建することでこれらの精神面や肉体面の問題が改善することもあります。また、画像診断などでわきの下のリンパ節に転移がなさそうだと判断された場合は、わきの下のリンパ節の中で最初にがん細胞がたどりつくと考えられるリンパ節（センチネルリンパ節＝見張りリンパ節）を摘出し、そこに顕微鏡検査で転移がなければ他のリンパ節の摘出を省略する方法（センチネルリンパ節生検法）があります。この方法により、腕のむくみ、わきの感覚の異常といった後遺症をさけることが出来ます。

2）放射線治療：放射線は細胞増殖に必要な情報を書いてある部分（遺伝子）に作用してがん細胞を死滅させます。多くの場合、副作用は軽度で外来治療が可能です。

3）化学療法（抗がん剤治療）：がん細胞の DNA そのものに作用したり、がん細胞が増殖する過程のどこかを障害したりすることで、がん細胞の増殖を抑えます。決められた組み合わせで、決められた量を使用することが推奨されています。また、様々な副作用がありますが、それぞれに対して有効な予防法や対処法があります。

4）ホルモン療法：乳がん細胞の増殖に必要な女性ホルモン（エストロゲン）の合成を抑制したり、エストロゲンとがん細胞の結合を邪魔することで、がん細胞の増殖を防ぎます。

5）分子標的治療：がん細胞の増殖に関わる特定の因子を狙い撃ちする治療を“分子標的治療法”、それに用いる薬を“分子標的治療薬”といいます。分子標的治療薬は、がん細胞をピンポイントで狙い撃ちするので、大きな副作用なしにがんを抑える効果が期待できます。

【さいごに】

乳がんが見つかっても、早くに治療すればより高い確率で完全に治すことができます。さらに、乳房を温存しながら、わずかの外科切除（手術）でがんを取り除くことも可能です。乳がんの早期発見の秘訣は“自己検診”の習慣を身につけること、そして“乳がん検診”を定期的にうけることにあります。自己検診と定期検診で乳がんの早期発見を心がけてください。

乳がん予防に関する生活習慣

予防的な因子	危険な因子
運動	肥満（閉経後）
授乳	（成人期の）体重増加
食物ポリフェノール（大豆、緑茶）	アルコール
	喫煙（閉経後）

世界がん研究基金/米国がん研究協会の評価報告書（2007年）をもとに、当院の矢野の評価を追加した（青字）。

心強いチームの紹介

がん相談支援センター

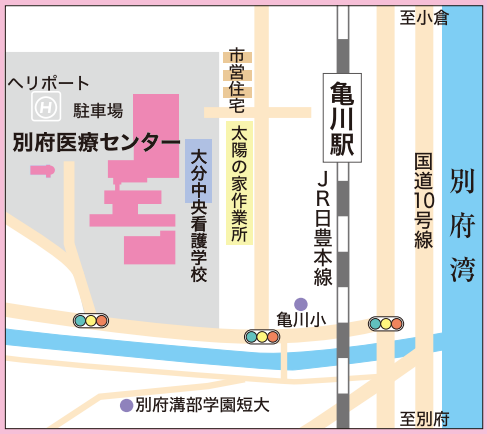
当院には、患者さん・ご家族をはじめ地域の皆さんのがんに関するさまざまな不安や悩み（医療費、転院、保険、福祉制度など）の相談窓口として、がん相談支援センター（場所:外来棟1階）があります。お気軽にご相談ください。

緩和ケアチーム

当院では、がん診療をうけている患者さんのからだの痛みやこころの苦しみを和らげ、その人らしい生活が送れるように支援する専門の医療チーム（緩和ケアチーム）が活動しています。緩和ケアチームの支援をご希望される場合は、担当医・看護師にご相談ください。

MEMO

交 通 案 内



- JR亀川駅より亀の井バス別府医療センター行き6･23･26番系統に乗車、別府医療センター前で下車（駅よりバスで8分、徒歩で12分）
- JR別府駅東口より亀の井バス23･26番系統に乗車、別府医療センター前で下車（駅より25分）
- JR別府駅西口より亀の井バス6番系統に乗車、別府医療センター前で下車（駅より25分）
- 大分自動車道別府インターチェンジより自動車で10分

地域がん診療連携拠点病院

独立行政法人 国立病院機構

別府医療センター

〒874-0011大分県別府市大字内かまど1473番地
TEL(0977)67-1111　FAX(0977)67-5766
ホームページアドレス　http://www.beppu-iryou.jp/

2015.12.1改訂